
愛だの恋だの

雨音未波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛だの恋だの

【Nコード】

N8940C

【作者名】

雨音未波

【あらすじ】

好きになる筈なかった人を好きになって、彼は遠い人だから余計辛くなって、でも諦めたくない女の子のお話。彼は遠すぎたんだ。

第1話 まだまだ近くない距離（前書き）

恋愛の話です。こちらもよろしく願います。

第1話 まだまだ近くない距離

愛なんて、恋なんて、恋愛なんて馬鹿馬鹿しい。

本気になるなんて頭が軽い女しかいない。

信じない、あたしは信じない。

こんな奴を好きになった自分を、あたしは信じない。

あ……また見つけた。

今日で三回目。

あなたはモテる。だからあたしみたいな凡人な気持ちなんて分からないよね。

だからこっちに気付かないで、見ないで。

あたしの赤い顔を見ないで。

あなたがあたしを見つけた。それは愛しそうに微笑んでくれる。だけれどあたしにとってそれは毒でしかないんだよ。

分かってよ……。

今日もあなたは、その笑顔を別の女にも見せるんでしょ？
だから見ないで、どこかに行つて。早く、早く。

あなたは、友達と笑いながら、あたしの横を通つていった。

それがどんなに苦しいか、胸が締め付けられるか、一生気付かない
くせに、あなたにはまた出会つてしまう。
最悪だよ、こんなの、いらぬ。

また今日も涙を流した。
あなたの声を聞きながら。

あなたはこんなあたしなんて眼中にない。それでもいいつて思つて
る自分が嫌い。大嫌い。
だけどね、求めてしまうの。愛してしまうの。
あなたにとってすごく小さなあたしでも、いいつて思つちゃうの。
あたしはあなたにハマつてゐる女の一人。
あなたにとって大したことない女の中の、一人。
悲しくて、辛くて、自分を見てほしい。
だからあたしを見て、笑つて、その笑顔を、あたしにちょうだい。

「知沙」

呼ぶな、バカ。あたしの名前を呼ぶな。調子に乗るな、アホ。

「今日の来てなかっただろ。だからはい、これ」

渡された物は、紙切れ一枚。

それだけで嬉しくなるあたしはもっとバカでアホ。こいつよりアホだ。

「期間限定なんだから、大切にしろよ？ お前の為に取っておいたんだからな」

渡された物は、あなたの言葉が書かれた紙。
みんなへ送った至上最高のメッセージ。

やっぱりあなたの方がバカでアホだ。

これを大切にするファンの一人にしないでほしい。
でももらう。あなたが笑ってるから。その笑顔は、今はあたしのも
のだって思ってもいいよね。
でもあたしは素直じゃないから、ごめんね。

「自惚れんな」

あなたの前に出した紙切れ一枚。それを見てあなたは驚いた顔をす
る。あたしはこれが見ただけでも満足。
実は持っていました。

あなたは苦笑する。
あたしも笑う。
この時間が好き。

お互いに紙切れを持って、それを交換した。
あなたにはあたしがあげたものを。
あたしにはあなたがくれたものを持って、別れる。

また会いましょう、今夜。

あなたのステージで。

第1話 まだまだ近くない距離（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。また次回もよろしく願います。そんなに長くはならないので、最後まで付き合っていただけなら嬉しいです。

第2話 今日も見上げる

恋愛に一生なんてあるのかな。もちろんあたしとあなたの間にそれはないけど、あなたが輝いてる時間だけは、一生ものだよ。

今日もあたしは、あなたのステージに行く。

「知沙！ 最前列取ったよ！」

「はいはい、分かってるって」

半ば呆れ気味にあたしの親友、結子の興奮した声に答える。結子が興奮するのも無理はない。最前列なんて取るのに苦労するから。学校でも同じ。みんな前に行きたがって最前列はものすごく人で埋まる。

結果、最前列で見れるなんて万に一つの奇跡。それが二人分取れたんだもん、興奮するよね。

ふと体育館中が暗くなった。周りから女子達の叫び声が聞こえてく

る。

ステージだけが明るくて、始まる時間が近づいてきた証拠。

…… 始まるんだ。

あたしは心の中でこれから始まる事に興奮を抑えられなかった。声を出したい衝動に襲われる。でも声を出さないで、あたしは黙ってステージを見つめた。

これから出てくるあなたを見守る為に。

「キャー!!」

女子達の声が一層強くなる。出てくる、あなたが。あたしの目の前に。

ステージを踏む足音が一つ、まず現れたのはドラム担当の爽^{あきひろ}。次に現れたのはギター担当の良輔^{りょうすけ}。次はベース担当の隆^{たか}。そして最後に現れたのは……。

あたしの目をいつも釘付けにする。

ヴォーカル担当の優^{ゆう}

あなたは、今日もあたしから遠い距離に
いるんですね。

四人が光に照らされて、それぞれがそれぞれの位置についた。優は
あたしのいる場所から斜め前に立っている。近いけど、眩しくてそ
こからじゃあたしの姿は見えない、きつと。

もどかしい距離。

「今夜も盛り上がって行こーぜ!!」

「キャアアー!!」

優の言葉と共にベースから音楽が流れる。そしてドラム、ギターも
音に乗せて流れて、最後に優の甘くて力強い声が重なる……。

“透明な世界 君見つけ 走って駆けてく 思い出と このままず
っと二人でいたい 小さくて 儚くて 潰れてしまいそうな思いだ
けど”

バラードのような歌だけど、音は明るく
て、アップテンポな歌。あなたを思い浮かべるような、そんな音。
あたしはこの歌を聞いた時、一瞬で好きになった。切ないバラード

もいいけど、こんな歌も好き。

すべて、あなたの想いが詰まってる。

あたしは今夜も、目を閉じて、耳を澄まして、あなたの声を聞く。

あなたの声は、何もかもを魅了するよね。

頭に思い浮かぶは、あなたの笑顔だけだった。

「お疲れー！！」

カンッと心地いい音が四つの空き缶によって響いた。

今バンドのメンバーがいるのは、結成された時に作られた部屋、所謂楽屋みたいな場所だった。

そこでいつも始まる前に心を落ち着けたり、終わった後にこうやって盛り上がりたりしてる。

その場所に呼ばれるのはいつもあたしだった。
もちろん親友の結子も。

「隆！ 今日もカッコ良かったよ！ まじ最高だったっ！」

「サンキュー！ ステージから結子見え
たから！ 応援ありがとな」

結子とベース担当の隆は付き合ってる。ちなみに爽も年下の彼女が
いて、良輔は彼女募集中だって前言ってたな。
でも聞いた話によると、今爽は修羅場らしい。
彼女とものすごい大ゲンカして、今も冷却期間なんだって。
優は知っての通り彼女無し。それはあたしがよく知ってる事。彼女
がいたらあたしはこの場所にいないから。

「ラブラブで羨ましいなー、二人は……」

空き缶を口に付けながら良輔がぼやく。その言葉に結子と隆は見せ
つけるように抱き締めあった。

それを見て良輔は叫ぶ。

この叫びが煩いんだよね。

「煩いから良輔。お前だってその気にな
れば彼女くらい作れるだろ？」

爽が冷めた声音で呟くと、良輔は爽に飛び付いた。

爽可哀想……。

良輔はこのメンバーの中で一番煩くて元気な奴。でもムードメーカー的な存在で、みんなからの信頼は熱い。

爽は冷めた部分もあるけど、頼りになるいい奴。お兄ちゃんみたいな人で、あたしもよく相談に乗ってもらってるんだ。たまに見せる笑顔がほんとに美しいの。隆はチャラ男みたいな奴だけど、恋には一途の優しい奴。だから結子の事はすごい大切にしてくれる。親友の彼氏にはもってこいの男なんだ。安心して任せられるよ。

優はメンバーの中で二番目に落ち着いてる奴かな。

一番は爽。みんなの事を一番に考えてくれる思いやりが多い男。でもチャラ男部類に入っちゃうんだよね、何故か。歌とメンバーを一番大事にしてる、カッコ良くて優しい男。だからあたしも好きになっちゃう訳で……。

付き合うなら隆が一番良いと思う。良輔だって煩いけど元気があって退屈しない。爽も彼氏にしたいなって思えるような性格持ってるし、バンドのリーダーだし。

なのにどうしてあたしは優が良いんだろう。優しか見えないんだろう。

……これが恋だよね、認めたくないけど。

「はあぁー……。あと1ヶ月で“GRO

UP”も一周年か……」

ため息と一緒に呟いた良輔の声は、他のメンバーにも聞こえていた。

“GROPE”っていうのは、優、爽、良輔、隆がやってるバンド名の事で、学校にある軽音部から生まれた今や学校内ですごく有名なバンドなんだ。四人が一年の時に始めたバンドで、四人が軽音部に入るまで、軽音部は廃部間近だったらしい。

でも四人が軽音部に入ってバンドを作ったから、廃部にならないで済んだんだって。

それで生まれたのが“GROPE”っていうバンド。

まさかここまで人気になるなんて思ってたって、四人共笑ってたよ。

でも四人共本気だったけどね。

今はみんな歌が命ってくらい歌を愛してるし、バンドメンバーを愛してる。

あたしと“GROPE”が出会ったのは、ほんとに単純だった。ただあたしが“GROPE”に惚れただけなんだけど。

入学式の日、あたしと四人は出会ったの。

第2話 今日も見上げる（後書き）

ノートに書いていた小説を違う風にしたのがこれです。音楽、バンドの話は私自身書きやすい話なので、すぐに更新できるといいなと思います。ではここまでありがとうございました。評価、感想をくれると嬉しいです。

第3話 出会いは最高

四人と出会ったのは、桜が満開に咲く季節。春真っ只中の時期だった。

あたしは期待に胸を膨らませて新しい教室に入った。初めて見る人、中学も一緒だった人、様々だった。

席が近くの子と話して仲良くなって、これから楽しい高校生活が始まるんだってウキウキしてた。

でも…… 実際は違ってた。

クラスで浮く人って一人ぐらいいるもの。そこから始まるイジメ。それがあたしのクラス、1 Aにはあったんだ。

最初は初歩的なイジメ。

次には典型的なイジメへと変わっていった。

ターゲットにされたのは暗くてあまり話さない女の子。一般的にターゲットにされやすい女の子。

その子はいつも一人で、友達もいなくて、あたしは結構気になったりしてた。

でも近寄る勇気が無かったの。みんなから嫌われてるから。自分もいじめられるんじゃないかという恐怖心、辛さ。分かってたけど、やっぱり近寄れなくて。

だからその子はずっと一人で、みんなからいじめられて、あたしは嫌な気持ちになった。

ただど助けられなかった。同じクラスの結子に相談したけど、結子もあたしと同じ気持ちで、いじめは嫌だけど自分もいじめられたら嫌だから何もしないって言われた。所詮そんなもん。いじめはいつまでも無くならない。

でもその子へのいじめは徐々にだけど無くなっていったんだ。今でも少しだけあるにはあるけど、前よりひどくはないし。あたしも安心できた。理由は分からないけど、その子に話し相手ができたのが一番の原因だと思う。それは嬉しかったけど、あたしの胸はすっきりしなかった。

人の悩みは尽きないもの。

あたしの悩みはいじめ以外にも沢山あった。

勉強に、人付き合い。

あまり上手くいかない友達関係、難しくなる勉強。

日々の高校生活。

すべてにイラついて、自己嫌悪したりした。

ストレスも増えて、泣きたい日々もあった。

でもこれは我慢すれば解決できるものだと思ってたから我慢した。ただど……辛かったんだ。我慢しても悩みはひどくなる一方だったから。

初めて授業をさぼった時、あの時は授業に出るのがめんどくさくてさぼったの。適当に見つからない場所を探そうと思って廊下を歩いてたら、音楽室から音楽が聞こえてきた。ちようど音楽の授業をしてる時だった。あたしは音楽が好きだったし、暇だったから聞いていく事にした。

知ってる音、ピアノが奏でる音色。

ああ……カノンか。

カノンはあたしの好きな音楽で、中学の時クラスで流行ってたなあ、などと音に浸ってたら、授業終わりのチャイムが鳴った。時間がものすごく経ってたらしい。

あたしは焦ってそこから離れて、教室に戻った。

ちよっとだけ、ほんのちよっとただけだけど、心が軽くなった気がした。

それはカノンを聞いたからだと思う。さぼって良かったなと、嬉しかった。

放課後にまた音楽室に来て、今度は自分で弾いてやろうと思って扉に近づいた時、聞き慣れない音がした。

それは音楽室の中から聞こえてきて、興味本意で覗いてみた。

扉の隙間から見たのは四人の男子。靴の色を見ると二年生だと分かって、咄嗟に離れようとしたけど、聞こえた音色にあたしは惚れ

た。

真ん中の椅子に座って、周りなど気にしないで歌う一人の男子。その声は綺麗で、軽やかで、力強く、もつと聞きたいと思うような歌声。

その周りを囲む三人の男子は、ギターのようなものとベースのようなものを持って声に合わせて弾いてる。

音楽が奏でられて、美しい音に綺麗すぎる声音。

つい聞き入ってしまった。

数分して音が止まり、四人は雑談に入る。それでもあたしはずっと四人を見つめていた。また歌わなかなという期待をして。

でもその時、制服のポケットに入ってる携帯が震えたのであたしは携帯を取り出した。結子からで、メールがきた。今どこっていう内容。あたしはすぐに、すぐ戻るから教室にいてとメールを返し、教室に行こうと戻ろうとした時にまた四人を見た。

記憶に残しておく、四人の顔。しっかりと頭に焼き付けてあたしはその場を離れた。

結子に会ってさっきあった事を説明した。また四人に会いたいと言った。

会えないかなと呟いた時、結子が簡単にあたしに言ったのだ。

「それってあのバンドじゃない？」

……って。

なんだ、意外と簡単に見つかったじゃん。

あのバンドと言うのは、今学校内で有名な軽音部からできたバンド“GROPE”。

いつも音楽室で練習してるんだって。でも有名になるのは分かる。すごい綺麗な音色だったから。また聞きたいと思ったから。

あたしは結子に誘われて“GROPE”のライブに行った。いつもライブは体育館でやってるみたいで、すごい人気だからライブの時は体育館全部人で埋まるんだって。それだけ人気の“GROPE”に近づけるかな、なんて思っていたけど、意外とあっさり近づけてそれは結子が積極的にメンバーにアタックしてくれたからなんだけど。

実際は結子がメンバーの隆に惚れたからアタックしたんだけどね。でもそのおかげでみんなと仲良くなれたし、結子は隆と付き合えたし、あたしは恋をしたし。悩みも“GROPE”の歌で軽くなった。だからみんなには感謝してるんだ。いつかお礼言うからね。

みんなは本当に優しく、温かくて、何度勇気づけられた事か。

あの時の出会いは一生忘れないよ。
優、爽、良輔、隆。

「悩み？ そんなの俺達の歌で忘れちゃいなよ！」

「俺達は自分の歌で勇気づけられてるから。情けないけどな」

「何でも前向きが大事だって」

「また悩みがあったら俺達の歌聞きにきてよ。また歌ってやるから」

あの出会いは最高だったよ。ありがとう、
“G R O P E”。

第4話 恋愛は二人のもの

今日もあたしはあなたと歌を奏でる。

それがあたしの日常。

終わらない時間、永遠であってほしい愛。

あなたは忘れてないよね？

あたしと見つけた未来を。

「爽彼女と別れたの!？」

「らしいよ、朝隆から言われた」

朝教室で結子から真剣な顔で、話があるなんて何の話かと思っただけ、まさか爽と彼女が別れたっていう報告だったなんて。

別れるなんて思ってた。ケンカしててもちゃんと仲直りする二人だったのに、どうして？

何があったの、爽……。

「今日四人共“ GROPE ”の一周年のライブ練習する為に朝から部室に集まるんだって。だから知沙も行かない？ 爽の事気になるし、授業さばれるよっ」

「結子、あんたそれが目当てでしょ。どうせ優達に帰らされるよ」

“ GROPE ”一周年。あと1ヶ月したら“ GROPE ”は結成一周年を迎える。だからそれを祝う為にライブをするんだって。新曲も作って、ほんとはもっと前から練習してたみたいだけど。

一周年を迎える事はとても喜ばしい事、でも爽の事の方がすごく気になるから……。

あたしは結子と一緒に四人がいる部室へと向かった。

「隆ー！ 来ちゃった！」

「は？ 結子と知沙！ 何で？」

四人共相当驚いた顔してるよ。そりゃそうか、朝に来るなんて初めてだしね。

「応援しに来たよ！　どっ？　順調ですか？」

結子はもちろん隆にベッタリとくっついていきます。
隆も大変だね、ほんと。

「知沙、何しに来たんだ？」

……あなたの声はあたしの時間を止まらせる。それほど影響してるなんてあなたは知らないよね。

「んー、ちょっと用があつてね」

適当に誤魔化して目的の人物を探す。あ、いた。窓を見てボーッとしてる爽。あれはめっちゃ辛いな。

「もしかして、爽の事か？」

「ん、うん……。心配だし、話聞きたい

んだよね」

「ほぐほぐにしとけよ」

苦笑しながら優はあたしから離れて良輔の傍に行ってしまった。
心臓の煩さも収まってくる。あなたが近くにいるだけであたしの心臓は早くなっちゃうんだよ。覚えとけ、バカ優。

優に指で作った銃を向けて、口でパンツと小さく呟いてあなたの背中を撃った。

その後あたしはすぐに爽の元に駆け寄った。
爽はあたしに気付いて視線だけを向ける。

「爽！　しっかりしろ！」

バシッと背中を思いきり叩いてやる。でも痛くないのか、何も言わない。

いや、心ここにあらずなんだな。
重症だなこれは……。

「……なあ知沙」

「何？　どしたの？」

「俺さ……続ける自信ない、彼女と」

いつもの爽らしくない。
恋は人を変える。昔誰かが言ったのを聞いたけど、ほんとにそうだ

ね。

爽は恋でこんなに変わっちゃったよ。

「彼女……浮気してたんだ」

「えっ！？　う、浮気ですか！？」

まさかあんな可憐で純粋なあの女の子が浮気しちゃったの！？　と
てもしそつには見えないけども！

「まじム力つく……」

そのまま爽は机に突っ伏してしまった。

ム力つくよね、浮気されたら。てか浮気ってあり得ないよ。何で？

こんなに良い男と付き合ってるのに浮気するなんて……。
信じられない。

「……このままでいいの？　爽は」

「俺にどうしろっつーんだよ」

「まだ好きなんですよ？　だったら諦めちゃダメだよ。好きなら頑
張って……」

「知沙には分かんない」

あたしはもうそれ以上何も言えなかった。
爽が可哀想すぎて、同時に彼女への怒りも出てきて、それであたしは一つの案を思い付いた。

実行は放課後、結子と一緒に。

生徒が沢山集まる時間の玄関に、あたしと結子は立っていた。
ある人を探す為に。

「そろそろ来ると思っただよねー」

「知沙、あんたも随分変わったよね」

冷めた、呆れが混じってる声で言われても何とも思わないよ。今のあたしは爽の為に動いてるんだから。

「なんでそんな爽の事に執着するの？ これは爽と彼女の問題だと

思っただけど……」

ため息を吐かれたけど、そんなの気にしない気にしない。
今は彼女探しに集中。

「あたし隆のどこ行きたいよー、ねえ知沙……あたし」

「発見！」

結子が言い終わる前にあたしはさっさと彼女の所に駆けていった。
結子はまたため息を吐いて渋々あたしの後を追う。

彼女こと、爽の元彼女の若葉ちゃんは本当におしとやかでおとなしくて可愛い女の子。委員会とかの仕事やクラスの仕事とか文句も言わないでやつちゃう彼女が、浮気なんてするわけない！！

「若葉ちゃん！ ちょっと待って！」

帰ろうとする若葉ちゃんを後ろから呼び止めた。

若葉ちゃんは驚いた顔をしたけど、すぐに笑顔になった。
この笑顔が可愛いんです。

「知沙ちゃん、どうしたの？」

「う、うん……話があった」

「……………爽君の事？」

俯いて暗い口調になった若葉ちゃん。でもあたしは頷いた。確かめなきゃいけない事があるから。

「若葉ちゃんは、その……。……………う、浮気したの？」

「直球すぎるだろ」

後ろから結子のため息混じりの声がした。確かに直球すぎたかもしれない。

「それは、えっと……。……………場所、変えてもいい？」

若葉ちゃんの言葉に頷いて、三人は人がいない階段辺りに移動した。三人は沈黙に包まれて誰も話せずにいたが、若葉がふいに話し始めた。

「爽君との事心配してくれたんだよね？ ごめんね、心配かけて……………」

「全然いいよっそれより……………なんで別れちゃったの？ やっぱり若葉ちゃん、浮気したの？」

知沙の問いにまた沈黙が流れる。若葉は俯いて、ゆっくりと顔を上げると二人を見つめた。

「……………爽君以外に、ほかに好きな人ができたの」

「……………え」

知沙は一瞬何を言われたのか理解できなかった。しかし頭はすぐに覚醒して、言葉の意味を瞬時に理解する。
若葉は確かに好きな人ができたと言った。

「多分爽君はその人と私が一緒に帰ってる所を見たんだと思う。私もそのまま何も言わなかったから尚更こじれて……………結局別れる事になったの」

若葉の言ってる事は分かる。でも何故だか納得いかない。
だって、爽はまだ……………。

「なるほどね……………分かった。じゃあもう若葉は爽の事は好きじゃないんだね？」

「う、うん……………」

突然今まで傍観してた結子が若葉に話しかけた。結子はため息を吐

いて、若葉を見る。

「それじゃあもう若葉は関係ないよ。きっちり別れたのにどうこう言う事ないし」

「ま、待ってよ結子！ 若葉ちゃんは良くても爽は……」

そう。爽はまだ若葉が好きな筈だ。なのにこんなやつてひどすぎる気がする。納得いかない。

「知沙、分かってる？ これは爽と若葉の問題なんだよ。他人がいちいち口出しする事じゃない。爽自身が何か相談してきたなら話は別だけど、後は二人が解決する事だよ」

「だけどっ」

「知沙が心配する気持ちも分かるけどさ、あたし達がしゃばっていい事じゃないんだよ？ 二人の恋愛なんだし、二人が決めた事なんだから」

結子の言う事も分かる。

「けどそれでいいの？ 爽の事を考えるとこれじゃダメな気がするよ……」

これっておせっかいなのかな？

「もう爽君とは話したよ。別れる事にした」

「そっか。引き止めてごめんね」

「うっん、それじゃあ私行くから……」

「ばいばい、またね」

「ばいばい」

手を振って若葉は玄関の方へと歩いていつてしまった。知沙は手を振る事ができないまま、放心状態になり固まっている。そんな知沙を結子は見えたため息を吐くと、知沙に言った。

「……恋愛ってさ、難しいよ。好きでも別れなきゃいけない時もある。でもいつまでも引きずってちゃいけないんだよね、爽はもうきつと大丈夫だよ。隆達がいるし」

自信満々に答える結子を疑問に思いながら、あたしは爽と若葉ちゃんの事をひたすら考えた。

好きな人ができた若葉ちゃん。それを認めて、でもケンカして好きなまま別れてしまった爽。

だけど爽はもう吹っ切れたのかもしれない。

あたしには分からないけど、恋って時間が経てば傷は浅くなるのだと思う。

まだまだ未来はあるんだし、道はある。

あたしが心配する事なかったのかもしれない。
爽はきつと大丈夫、そんな気がする。

あの時の爽はものすごく辛そうだったけど、あたしは納得できなくても爽は納得したかもしれないね。
最初から他人が口出ししちやいけないんだ。
恋愛は二人がするものなんだし、他人は他人。
大丈夫……だよ。

「……うん、そうだね。爽は大丈夫だ、きつと」

「心配なら様子見に行く？」

「……行く！」

笑って、一つの思い出にしようね、爽。まだまだ未来はあるんだしさ！

第4話 恋愛は二人のもの（後書き）

爽と若葉ちゃんは結局別れてしまいました……。これで“GROUP”は隆以外全員彼女なしになりましたね。この事がこれからどう響くのか、温かく見守っていただけると嬉しいです。ではここまでありがとうございます。また次話もよろしくお願いしますね。

第5話 小さな贈り物

部室に行ってみたら、爽は優達と楽しそうに活動していた。やっぱり余計な心配だったのかもしれない。

「大丈夫そうみたいだね」

「うん……」

でも無理して笑ってるなんて事ないよね。
大丈夫だよね……。

「隆ー！」

「おお、結子。どうした？」

「応援きた！ 何か手伝う事ない？ 何でもやるよ！」

結子はいつまでも隆とラブラブでいいね。

あたしはきつとまだ…… 勇気ない。

優となんて、全然進展しないまま。このまま時間が過ぎて何もな
まま終わっちゃうのかな。

「暗いぞっ」

「痛っ」

頭を叩かれて叩いた本人を睨む。またこいつはこつやってイタズラ好きなんだから。

「良輔ってほんといつでも元気だよ。羨ましい限りだよ」

「こつという性格は何かと得だぞ！ だから知沙も元気出せ！ 何悩んでるか知んねーけど」

悩みなんでいつぱいあるよ。数えきれないくらいね。

「じゃあ元気出る事して」

「例えば？」

「うーん……じゃあ、一曲歌って！」

「はあ！？ 俺が歌うのか？」

「そつダメ？ 良輔歌えるじゃん！」

「歌えるけどさ……そういう事はヴォーカル担当の優に頼めよ」

優の名前を聞いただけで心臓が強く高鳴る。良輔は知らない、あたしが優を好きな事。だからこんな事言えるんだ。
あたしは優が近くにいただけで息苦しくなるのに……。
こんな想いは、あたしの中にずっと秘めてるだけでいい。

「いいのっ！ 今は良輔に歌ってほしいんだから！」

すぐるような目で見つめると、ほらいちころ。
頬を掻いて照れた仕草をする良輔。それで次には……。

「……分かった、仕方ねえな！」

「わあい！ ありがとう良輔！」

やっぱり良輔は単純。
でも優しい。

そんなあなたは本当に素敵な人だよ、良輔。

「んじゃあ一曲……」

近くに置いてあったギターを手に取り、椅子に座って弾く姿勢をとる。

急にまじめな顔になり、この時の良輔の表情はあたし好きなんだ。
そして一呼吸おいて、ゆっくりと手を動かす……。

“ 冬のまだ寒空の下 君は僕の手を離した 追いかけたい衝動と
行かせたい想いとが混ざって 足を踏み出せなかった ”

この歌は“ GROPE ” が結成されてから間もない頃に作った歌、
題名がない歌なんだ。題名を付けない理由は単純、付けたくないか
らしい。

題名がないのもカッコ良いつて理由で。

だけど人気の曲。

あたしも好き。

“ こんがらがる意識のパズルを組み合わせる 君の笑顔を浮かばせ
ただけとそれ以上はなかったよ ねえ 僕はちゃんと君を愛せて
たかな ”

歌詞が切なくて、ギターだから尚更切なさが込み上げてくる。ほん
の少しだけど視界が歪んだ。

“ もう一度過去をやり直したい それで君と笑う事ができるのなら
なんだってしてやるのに 僕は無力だ 君をまだ解放できないで
いる ”

ああ……切ないよ。
切なすぎるよ。

こんな気持ちは、辛すぎるよ。

歌はそこで終わり、ギターの音色で最後は切なくしめた。
終わった時、あたしは涙を流した。

泣く為に歌ってもらおうと思った訳じゃないのに、どうして涙が出てくるんだろう。

どうして……どうして？

「おい、知沙！ 何泣いてんだよお前！」

「あ、は……ごめん……。ちょっと、顔洗ってくるね！」

逃げるようにその場を離れた。良輔はず
っとあたしを心配そうに見つめてくれた。でもそれが余計辛くて、
また泣いた。

最近情緒不安定なんだよね。優との事もあるし、それからもう一つ、
一番悩んでる事がある。

まだ解決できなくて、誰にも相談できなかった。
結子にも……。

それは……。

クラスの友達のこと。

あたしには結子以外にも仲の良い友達がいて、最近はみんな仲良くやってきた。でもいつからか亀裂が入って、仲良くできなくなってしまうた。

一人一人が孤立するような形になって、あたしはまだ結子がいたけど他の子は一人になったりした。

つまり、みんなそれぞれが他の友達を嫌ったって事。あたしはみんな大好き。

だけどみんなは違う。だから離れなきゃいけないくて、辛くて、悲しくて。

また前みたいに戻りたいって思っても上手くいかなくて。

爆発した、みんなが。

「はあ……恋の歌なのに、変なの」

もう戻れないのかな、あの頃に。みんなで楽しかったあの頃に。戻りたい……。

窓を見れば雨が降っていた。空は曇り空で、あたしは悲しくなった。晴れるように精一杯祈った。

今思えば、この時のあたしはバカみただったよね。

必死になりすぎて、周りが見えなかったんだ。

もし冷静になっていれば、何か変わったのかな……。。

第6話 みんなといつまでも

あの頃のあたし達を今はどう表現したらいいんだろう。

「みんなおは……」

「行こー」

「……………」

暗くなった目の前とどう戦ったらいいんだろう。
未だに分からない。
このもどかしい距離。

「おはよう……」

「おはよ知沙！ 朝から元気ないぞってか昨日どうしたのさ！ あ

の後勝手に帰っちゃって！」

「ごめん、用事あったからさ」

今日も作り笑い。

そんな自分が大嫌いなもの。あなたはあたしの本当を知らないから、闇を知らないから。だから近づけない。

でもね、あなただから笑えたんだよ。

自分を少しだけ取り戻せたんだよ。

それは今も変わらないから、だから惹かれたの。

「あつな　ずな　おはよー！」

「…………おはよ」

な　ず　な…………。

あたしの友達、だった子。今は違うけど…………。

ねえ、この距離はどうしたらなくなるのさ。
知らないよ、あたし…………。

「知沙」

「っ…………」

「あれ？　なんで良輔こんなところにいんの？　ここ一年の教室だけど」

「知沙に用があつてさ。知沙、ちょっといいか？」

「……うん」

良輔に呼び出されて向かった場所は中庭の人があまり来ない所。良輔は昨日のあたしの事が聞きたくて来たんだ。それくらい分かる。

あたしと良輔は芝生の上に腰掛けた。

あたしは青い空を見つめて良輔の顔を見ないようにする。そうしないと今は辛い。

「……知沙さ、昨日どうしたんだよ。あの後心配したんだぞ？　他のみんなも心配してた」

「ふうん……」

「ふうんてお前な……」

だって今はそれしか言えない。
ねえ、良輔は分かってくれるの？
このどうしようもない気持ち、分かってくれるの？

「……………何か悩みがあるなら言えよ、相談に乗っから」

優しくあたしの頭を撫でてくれるから、驚いて良輔の顔を見てしまった。

良輔は優しく笑ってあたしを見てた。

途端に目の奥が熱くなって視界がぼやけてくる。

頬に温かいものが伝う。

それを見られないようにあたしは膝を抱えて黙りこんだ。

「……………じゃあ、またな」

あたしの涙に気づいたのか、静かにそう告げて良輔は立ち上がった。あたしは顔を上げられなくて、耳で良輔が遠くなっていく音を聞いていた。

「……………ごめんね」

誰にも届く筈のない言葉を青空の下、つむいだ。

こんなに好きなのに
こんなに大事なのに
あなたは何も言ってくれない
私があなたの負担になるから
だから笑って
だから元気を出して
こんな想いはあなたがする必要はない
あなたが我慢する必要はない
笑顔を見せて
私がいるから
私がいつまでも側にいるから
泣かないで

窓を開けて月を見ながら口ずさんだ歌、
“ GROPE ” の、
『 友達
へ』
この歌をみんなにプレゼントするよ。
だから、また前みたいに帰ろう。
一緒にいよう。

こんな関係、嫌だ。

日に日に悩みは酷くなっていって、ストレスも溜まって、誰にも相談できない時。

元気になる源は“GROPE”の歌だった。
そのおかげで元気になる事ができた。

みんな、ありがとう。

あたしはみんなに出会えて、みんなの歌が聞けて幸せです。
もう少し元気をちょうだい、勇気をちょうだい。

明日、頑張るから。

「……………優、あなたの声に元気をもらいます」

月にあなたをかぶせながらそつと囁いた。

あなたはいつも笑っていますね、優しい笑顔で。

その笑顔をまだあたしにください。

もっともつと頑張るから。

ね、優。

第6話 みんなといつまでも（後書き）

もうちょっとでこの話も終わります。どうか最後までお付き合いしていただきたいと思います。それではまた次話でお会いしましょう（＾
）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8940c/>

愛だの恋だの

2010年10月28日09時23分発行